

第二部「善の研究」 第三編 善

第一章 「行為 上」 第二章 「行為 下」

「行為上」

行為とは…外面から見れば肉体の運動であるが、目的はあるが全く無意識な反射運動や目的が明瞭にされていない本能的動作とは区別しなければならない。「行為とは、その目的が明瞭に意識されている動作の謂」である。⑬

行為は意識された目的より起こる動作のことで、有意的動作の謂である。行為といえば、外界の動作も含めて言うが、意志といえば内面的意識現象をさし、「行為の意識現象=意志」である。

①結果の観念を想起、②その手段となるべき運動の観念を伴い、③運動に移る、このように意志なるものが発生する。⑭

○意志の発生

- ・意志が起こるに運動の方向・連想の方向を定める素因、衝動的感情として現れる ⇒「動機」
 - ・経験から得、連想から惹起する結果の観念 ⇒「目的」
 - ・意志の形（動機・目的）⇒「欲求」（意志の初め）
 - ・欲求が二つ以上ある状態「欲求の競争」の時は、最も有力な意識が動作へとつながる⇒「決意」
- 行為の要は、意志であって動作ではない。動作がなくても、意志があるのなら行為といえる。動作があっても、そこに意志がなければ行為とは呼べない。⑮

○意志の位置

意志は統覚作用の一種に属している。意志のほかに、思惟、想像も統覚作用に属している。自己という統一観念が本となっているが、統一の目的や方法が異なってくる。

想像：自然の模擬が目的
思惟：真理に目的がある
意志：自身の運動が目的



意志の運動の前には必ずその運動を想像しなければならない⑰
意志の背後には相当な理由があり、意志はある真理の上に働く
思惟によって成り立っている⑱

意識現象は意志と同一の形式を具え、すべて或る意味における意志であるということができる。これらの統一作用の根本となる統一力を「自己」と名づけるならば、意志は最も明らかに自己を発表したものである。

「行為下」はよくわかりませんでした…。すみません。

行為…意志と動作 この二つは原因と結果の関係ではなく、同一物の両面である。

動作は意志の表現であって、外から動作とみられるものが、内からみると意志である。⑳

はじめに

「哲学」、自分の名前の漢字についているにもかかわらず、知ろうとしたことは今まで一度もありませんでした。また今回読んでもさっぱり分かりませんでした。しかし、せっかくいただいた機会です。自分の経験と照らし合わせてみたいと思います。拙い文章・勝手な解釈があり、すみません。

「やらされている」感から「行為」へ

今回レポートを書くにあたって、自らの作業（レポートを書くこと）は、はじめ「行為」ではなかったと思います。「やってください」と言われたから「やっているだけ」であって、「やりたい」という動機もなければ、目的もない。欲求が、意志がありませんでした。レポートを書いている途中、子どもたちの様子とテキストの言葉を重ねていく中で気づいたことがあり、「発信したい」という気持ちに、行為に変わったと思います。

先日運動会が行われました。その中に 4.5.6 学年共同の組体操があります。組体操の練習が始まって間もないころ、昨年も経験のある 5 年生の中には、緊張感もなく、「組体操はやるもの」「いわれたからやっている」という子が少なからずいました。技が失敗してもヘラヘラしている。移動ものんびり。こっちはイライラ…。しかし、ある時から「行為」へと変わっていました。「6 年生が最後の組体操であること」を話し合ったことでの意識の変化、また技がうまくいかないことに悔しさ、成功した時のうれしさ、またそれを共有する仲間を認識してから意識が変わっていったと思います。練習を積み重ね、「成功させたい」というみんなの意志が一つのなっていくのを感じました。



まとめ

今回のレポート作成や運動会の組体操を通して、「動機」「目的」の重要性に改めて気づかされました。「ただやる」「やらされる」のではなく、「なぜやるのか」「そこにはどんなわくわく、ドキドキがあるのか」「うまくいくためにはどうしたらいいのか」「行為の先に何があるのかの見通し」などそういうものを示し、また子どもたちと探求していかなければならないと感じました。

